

「雑誌記事索引」の包括性と速報性  
——医学・薬学における収録誌、収録記事、タイム・ラグ——

A Study on the Coverage and Time-lag of *Zasshi Kiji Sakuin* (Japanese Periodicals Index)

佐 藤 和 貴  
*Kazutaka Sato*

*Résumé*

After examining the evaluation of periodicals indexes, the writer reports the results of his survey on *Zasshi Kiji Sakuin* (Japanese Periodicals Index) which is the representative periodicals index in Japan. The survey covered fields of medicine and pharmacology on; 1) kinds and number of titles indexed, 2) criteria for selection of articles to be indexed, 3) time-lag. The survey revealed the following three points:

- 1) The number of titles indexed (1966) is 292. *Zasshi kiji Sakuin; Kagaku gijutsu hen* (Japanese Periodicals Index; Science and Technology) covers approximately 35% of *Igaku Chuo Zasshi* (Japanese Central Review of Medicine).
- 2) The criteria for selection of articles to be indexed is fairly satisfactory.
- 3) The time-lag in the National Diet Library where the Index is edited is about 90 days while the same in the Kitasato Memorial Medical Library is approximately 120 days.

(Kitasato Memorial Medical Library)

序

I. 雑誌記事索引

II. 収録誌と収録記事

III. 速報性

結 語

序

調査・研究が行なわれる場合には、その重複をさけ、また能率的にそれをすすめるために、必ずといってよいほど、文献探索が行なわれる。文献探索は種々の目的のもとになされるが、次にあげる各項目によってほぼ網羅

することができるであろう。すなわち、①特定研究主題について過去に書かれた総ての文献を網羅的に探索し、その主題の知識の現状 state-of-the-art というものを明らかにする遡及的探索 retrospective search、②刻々進歩する特定主題分野の知識についてゆくために、継続的にカレントの文献をスクリーン screen する current awareness のための探索、③ある事実や、考え、

## 「雑誌記事索引」の包括性と速報性

方法、手技といった事柄について書かれた特定の文献の探索 specific literature search, ④データ・ブックやハンド・ブックで事足りるような特定の数値などの探索 data finding reference, ⑤意識的な目的を持たず、ただ漠然として何物か判らないもの、すなわちアイデアだとか、次の研究の主題であるとか、問題の解決の糸口などを求める browsing と呼ばれる探索,<sup>1)</sup> の五つの目的である。

適及的な文献探索をする場合、文献調査の方法はどのようにすれば良いだろうか。いわゆる“core journal”という、特定の分野において重要であるとみなされている雑誌について、総目次あるいは総索引を使って文献を拾ってゆくことが考えられるであろう。また、手許にある文献の引用文献、参考文献を手がかりにして、順次、引用文献あるいは参考文献へとさかのぼることを繰り返して、必要とする文献を収集してゆくことも考えられよう。

しかしながら、これらの方法は文献探索の一つの手段ではあるけれども、決して組織的な方法ではない。文献をできるだけもれなく、しかも重複しないように網羅的に広い範囲から収集しようとするならば、やはり、二次資料、すなわち、索引誌、抄録誌などの活用を考慮しないわけにはいかない。

とりわけ、索引誌は抄録誌などと比較すると、雑誌に論文が発表されてから二次資料化されるまでの期間が短かいので、一般的にいて、速報性においてすぐれているといえる。

ここにいう索引誌は、雑誌の論文（記事）単位に分析したいいわゆる題目索引を逐次刊行物形式で刊行した雑誌記事索引である。雑誌記事索引誌の役割は数誌以上の雑誌にいろいろな著者によって発表された論文（記事）の書誌的事項を記入し、一定の配列のもとに編成することによって特定の記入の検索を容易にし文献情報の効果的利用をはかることにある。

この雑誌記事索引を評価する際の着眼点は多くの人々によっていろいろ提示されているが、以下に数例を紹介することによって、それらのうちから共通する着眼点を抽出することにしよう。

I. G. Mudge は“雑誌索引の価値を決定する重要な点は、①収録資料の量と種類、②収録期間の長さ、③収録資料の索引の完全さ、④索引の質、すなわち、記入方法と情報が十分に与えられていること、⑤配列の使いやすさ、である”<sup>2)</sup> という。

また、L. Shores は次のような表に索引一般の評価上の留意事項をまとめている。

索引の研究と評価のためには；

### I 収録期間

- 1 年月日
- 2 頻度（もし、逐次刊行物ならば）——週刊、月刊、季刊など。
- 3 累積化——計画と頻度

### II 収録資料

- 4 数量——冊数、誌数、記事数
- 5 種類——図書、逐次刊行物、新聞、記録文書
- 6 主題——全般を扱うのか、特定の主題を扱うのか
- 7 スタイル——一般向きのものか、学術的なものか
- 8 国——アメリカのものか、外国のものか

### III 形態

- 9 包括的・選択的か、もし選択的ならば、その選択の基準
- 10 配列——辞書体、分類、著者名、書名、件名
- 11 記入の完全さ——著者名、書名、出典、対照事項、発行年月
- 12 注記——与えられている情報

### IV 特徴

- 13 きわだった点——特色の有無を照合するとよい。<sup>3)</sup>

わが国では、弥吉は I. G. Mudge の、西村は L. Shores の評価をそれぞれの著書<sup>4)</sup> や論文<sup>5)</sup> に引用して評価の決め手としている。また、陶山は雑誌記事索引の評価基準として、①索引の範囲、②収録期間、③発行度数、④索引法の適格さ、を挙げている。<sup>6)</sup>

長沢<sup>7)</sup> は被索引誌の種類・誌数と、その選択方法・収録期間などについて確認し、次に個々の被索引誌について、主要論文・解説記事・座談会・書評・雑報などのうち、どの程度の記事までを索引の対象としているのか、その選択基準について検討する必要があるとし、被索引誌についての評価にも言及している。

この論文は、わが国の代表的な雑誌記事索引の例として、国立国会図書館編集の「雑誌記事索引」をとりあげ、上述の評価上の留意事項から重要な着眼点を選んで、評価の基礎的なデータを収集しようと試みたもので

ある。もちろん、このような総合雑誌記事索引の場合にはすべての面から評価することが望ましいが、便宜上、「雑誌記事索引」科学技術編のうちから医学と薬学の部門を選び、次のような諸点の調査にとどめることにする。すなわち、①被索引誌の種類および誌数、②被索引記事についての選択基準、③速報性の三つの面である。これだけの調査によって、本誌の総体を推しはかることはできないが、少なくとも医学・薬学の文献探索の側面から利用する際に注意すべきいくつかの問題点は把握できる筈である。

## I. 雑誌記事索引

1948年7月、Illinois 大学図書館長の Robert B. Downs が来日し、国立国会図書館の経営指導にあたった。同年9月、2カ月にわたる指導を終え、帰国に先立って報告書を発表した。これは、「国立国会図書館に於ける図書整理 文献参考 サービス並に全般的組織に関する報告」と題して、1948年10月、国立国会図書館から刊行されている。

R. B. Downs は、この報告書の中で、「定期刊行物に関する二つの重要な出版、すなわち、逐次刊行物の総合目録表及び定期刊行物の索引が、日本には欠けている」<sup>8)</sup>ことを指摘し、次のように述べている。

逐次刊行物を利用するために必要なのは、*Index to Periodicals*, *Readers' Guide to Periodical Literature*, *Subject Index to Periodicals* などのような索引である。この索引がなくては、大抵の定期刊行物は活用されないのである。

国立国会図書館では、日本の定期刊行物に対する記事索引は、以前から続けられており、二三の題目については、1945年頃からとってある。カードに記載し、件名に従い整理してある。約500種の定期刊行物について実施しているが、特定の題目しか索引がとってない。この種の記事索引を各図書館で作成することは、費用がかかり、又完全なものもできないから、国立国会図書館が調査、研究に重要な全雑誌を含めて、組織的に記事索引を作り、少なくとも年刊、でき得れば、更にひんばんに定期出版することが望ましい。著者別索引と件名別索引とを作るか、あるいは件名別索引を作り、それに附録として著者名の索引をつけたものを作るのがよい。科学技術方

面のものと、社会科学人文問題との二部にわけて出版することも考えられる。<sup>9)</sup>

この「日本定期刊行物の内容記事時事索引」の出版の勧告に呼応して、1949年2月に「雑誌記事索引」第1巻第1号が刊行された。これは、1948年9月中旬に国立国会図書館が受け入れた国内刊行の雑誌類から収録したものであり、採録誌数約480種、採録件数は副出を含めて4,662件であったという。<sup>10)</sup> このときには自然科学系の雑誌も含まれていたが、独立して、現在の科学技術編の前身である自然科学編が刊行されたのは、さらに1年遅れて、1950年4月であった。

人文・社会編、科学技術編の創刊から約20年を経て現在に至る迄の道は決して平坦なものではなかった。20年にわたるいきさつは「国立国会図書館月報」所載の「雑誌記事索引」編さんの経緯と現状」にくわしく述べられているので、それに譲ることにするが、次の点だけは指摘しておきたい。

予算の不足、人手の不足という事情を認めたとしても、記入方式、被索引誌の選択、刊行頻度など無定見とも言うべき変更がしばしば重ねられたことは、利用者の便宜を念頭において索引作成がなされたかどうか疑わしい。実際に、これらの変更が文献探索の際にいかに障害となっているか、索引作成者は十分考慮しなければならない問題である。

しかし、1965年に分類方式に変更され、さらに、1966年、国立国会図書館分類表に準拠した分類方式になってからは、幸いにしてあまり大きな変更はなされていない

第1表 「雑誌記事索引」所蔵機関

機 関 別	国会図書館 経 由	発 売 元 経 由
政府機関・公共企業体	4	5
行政司法支部図書館	32	0
都道府県立図書館	46	0
市立図書館	3	1
図書館関係団体	2	0
大学図書館(国立)	43	58
"          (公立)	17	8
"          (私立)	63	66
報道関係	4	1
民間企業・研究所・資料室	0	40
計	214	179

## 「雑誌記事索引」の包括性と速報性

い。そして、現在では採録誌数は約1,300誌という、わが国の代表的な記事索引誌となっている。

本誌を所蔵する図書館も、「学術雑誌総合目録 自然科学和文編」によれば、現在継続中のもの185館を数えている。また、「現行医学雑誌所在目録 1968年版」によれば医学図書館協会加盟館47館のうち30館が所蔵していることになっている。さらに、最も権威のある数字としては、石山のアンケート調査<sup>11)</sup>があるが、これによると、寄贈先214機関、発売元からの直送(購入)179機関の計393機関(重複は考慮しないで)が所蔵しているとのことである。これを機関別に表示したのが第1表である。ただし、この数字は人文・社会編を含めたものである。

## II. 収録誌と収録記事

### A. 収録誌についての調査

#### 1. 収録誌

雑誌記事索引誌にとって、その収録している雑誌の質や量は大きな意味をもっている。そこで、収録誌の質の面から検討するための手がかりとして、雑誌の刊行機関をとりあげて、「雑誌記事索引」(以下、「雑索」と略す)の分析をおこない、あわせて刊行頻度についても調査をおこなった。

調査は「雑索」18巻3号(1967年3月に国立国会図書館で受け入れた雑誌を索引したもの)を対象とした。収録誌名一覧によれば、この号は、医学269誌、薬学22誌を掲載している。これをカードに転記し、発行所(刊行

第2表 刊行機関別収録誌数

刊行機関	医学	薬学	計
大 学	36	9	45
同 附 置 研 究 所	12		12
国 公 立 研 究 機 関	16		16
学 会	105	5	110
協会・研究会・団体	22	2	24
出版物の刊行を目的とする団体	18	1	19
民 間 企 業		4	4
民 間 研 究 所	7		7
報 道 ・ 出 版	51	1	52
そ の 他	2		2
計	269	22	291

機関)および刊行頻度を「医学中央雑誌」(以下、「医中誌」と略す)の収載誌目録——昭和41年(1966年)9月30日現在<sup>12)</sup>——に従って記入した。「医中誌」収載誌目録にないものについては、国立国会図書館発行の「日本科学技術逐次刊行物目録 1967」<sup>13)</sup>によった。

#### a) 刊行機関別収録誌

刊行機関別の収録誌数を表示したのが第2表である。収録誌数の多い順に挙示すれば、学会37.8%、報道・出版17.8%、大学関係15.4%という比率である。

#### b) 刊行頻度別収録誌

第3表に刊行頻度の別にわけた収録誌数を示した。月刊誌が最も多く99誌、以下、季刊、隔月刊と続き、年1回刊行のものは26誌であった。刊行頻度の低いもの、とくに年1回刊行のものは研究機関の年報類が主である。これら年報類は研究機関の地道な研究が結実したもので

第3表 刊行頻度別収録誌数

刊行頻度	医 学		薬 学		合 計
	欧 文 標題誌 (内訳)		欧 文 標題誌 (内訳)		
年1回(年 刊)	15		11		26
2	7	(1)	1		8
3	9				9
4 (季 刊)	67	(10)	1	(1)	68
5	2				2
6 (隔月刊)	44	(5)	4	(3)	48
8	1				1
9	1				1
12 (月 刊)	96		3		99
不 定 期	23	(1)	2		25
不 明	2				2
そ の 他	2	(1)			2
合 計	269	(18)	22	(4)	291

あって、「雑索」はこの種の資料を比較的天ねんに収録している。この傾向は医学、薬学についてだけの現象ではなく、「雑索」18巻12号(1967.12)誌名索引の末尾にみられる「刊行頻度別および分類別誌数一覧」<sup>14)</sup>(第4表)によってもわかるように、全収録誌の約3分の1弱が年刊のものである。

#### 2. 収録誌数

「雑索」に収録されている雑誌の数が少ないということとは科学技術編、人文・社会編を問わず指摘されている

第4表 「雑索」科学技術編の刊行頻度別収録誌数

刊行頻度	誌数	刊行頻度	誌数
半月刊	2	年4回	16
月刊	263	年5回	6
隔月刊	91	年6回	7
季刊	135	年7回	1
半年刊	80	年10回	1
年刊	405	年14回	1
隔年刊	1	不定期	225
年2回	15		
年3回	24		
		計	1,273

ところである。そして、そのことが「雑索」の大きな欠陥とされている。

しかしながら、従来、収録誌数の少ないことについて客観的な、説得力を持つデータはあらわれていないようである。そこで、医・薬学部門に収録されている雑誌数の推移を調査した。

#### a) 収録誌数

収録誌数の調査は「雑索」15巻(1964年)から17巻(1966年)までの3年間とした。調査の方法は、①15巻(1964年)については当時「誌名索引」がなかったので、各号の「収録誌名一覧」から医学および薬学の部門にリストされている雑誌をカードに書きうつし、収録誌カードを作成した。②16巻(1965年)、17巻(1966年)は、「誌名索引」があるので、16巻については⑩医学、⑪薬学、17巻についてはSC医学、SD薬学の部分にリストされている雑誌をカードに書き抜き、さらに、各号の「収録誌名一覧」により照合をおこない、欠けているカードを作成した。この際、注意しておかなくてはならない点は、15巻の「収録誌名一覧」は実際に収録した雑誌のみを記入しているので、1964年に一度も発行されなかった場合には「収録誌名一覧」にでていないことである。そこで、15巻の場合は実際に収録した誌数であり、16巻、17巻は収録の対象とした誌数である。

調査の結果は次の通りである。

	収録誌数		
	合計	邦文誌	欧文標題誌
15巻	261	219	42
16巻	265	265	0
17巻	292	272	20

16巻、17巻についても、15巻と同じように、実際に収録している雑誌数だけを取りあげて収録誌数を数えると、次のようになった。

	実際の収録誌数		
	合計	邦文誌	欧文標題誌
15巻	261	219	42
16巻	252	252	0
17巻	284	264	20

この両者に差が生じる原因は収録されている雑誌に休刊とか廃刊などがあるためである。休・廃刊誌は判明しだい「収録誌名一覧」から削除されることにはなっているが、休・廃刊の情報をつかみにくいことも原因になっている。

16巻で収録誌数が減少しているのは欧文標題誌の収録を中止したからである。この理由は「刊行速度著しく遅延につき業務量軽減のため」<sup>15)</sup>とされている。しかし、17巻になって、15巻のほぼ半数ではあるが、欧文標題誌の収録を開始して現在に至っている。

#### b) 収録記事

収録誌数については前述の結果を得た。しかし、「雑索」は人文・社会、科学技術全般を扱っている索引誌であるので、医学、薬学以外の分野の収録誌としてリストされていても医学薬学に関する記事を掲載していれば医学、薬学の部分に収録されている筈である。この点を確認するために、「雑索」の医学および薬学の部分の本文を調査した。

調査の方法は、15巻は件名索引なので除き、16巻、17巻については各12冊、計24冊の医学薬学部門の記事を調べ、その記事中で「収録誌名一覧」に医学、薬学として記入されていない雑誌と記事数(重出されている場合はそれぞれを1と数えた。つまり2カ所に同一の記事が索引されている場合には2となる。)を書き出した。

調査の結果、雑誌数とその記事数は、

16巻	124誌	340記入
17巻	185誌	520記入

であった。また雑誌数は16巻、17巻それぞれ延べ202誌、300誌であった。このことから他分野の収録誌であっても、医学薬学関係の記事が掲載されていれば索引されていることがわかる。

それでは、16巻124誌、17巻185誌を数えるこれらの雑誌は収録誌の分類上どの部門に属しているものであろうか。「収録誌名一覧」の20(16巻)あるいは21(17巻)

## 「雑誌記事索引」の包括性と速報性

の部門にどのように分布しているかを表にして示したのが第5表である。

第5表 他分野の収録誌の分布  
16巻

区 分	誌 数	区 分	誌 数
科学技術	35	原子力工学	2
数 学	1	その他の工業	1
天 文 学		生 物 学	8
物 理 学		(医 学)	
地 球 科 学	4	(薬 学)	
工 学 一 般	13	農 学	6
建 設 工 学	2	漁 業	4
機 械 工 学		水 産	2
電 気 工 学	10	生 活 科 学	7
化学・化学工業	15	そ の 他	13
鉱業・金属工業	1	合 計	124

17巻

区 分	誌 数	区 分	誌 数
科学技術	95	食 品 工 学	3
数 学	1	金属工学・	2
宇 宙 科 学		鉱山工学	
物 理 学		印 写 工 学	
地 球 科 学	3	その他の工学	
建 設 工 学	3	生 物 学	11
機 械 工 学	3	農 林 水 産 学	25
運 輸 工 学	2	人 類 学	1
電 気 工 学	10	(医 学)	
原子力工学	3	(薬 学)	
化学・化学工業	13	そ の 他	10
繊維工学		合 計	185

「科学技術」という区分が両巻を通じて、首位を占めているのはいわば総記といった性格をもっていることに起因するものと思われる。ここで注目すべき点は、そのことよりも、「その他」という区分に収録されている雑誌がいずれの巻においてもかなり多数を占めていることである。この「その他」という区分は「収録誌名一覧」や「誌名索引」にはなく、どの区分にも属していない雑誌を筆者がひとまとめにしたものである。

これらの16巻13誌、17巻10誌はいずれも「雑索」の人文・社会編に収録されているものであった。「雑索」が人文科学から科学技術に及ぶ広い範囲をカバーしている

索引誌であることによる利点はこのようなところにもあらわれてきている。

17巻185誌について刊行機関別に分けてみたところ第6表に示すような結果がでた。

第6表 他分野の収録誌の刊行機関

刊 行 機 関	誌 数
大 学	98
同 附 置 研 究 所	5
国 公 立 研 究 機 関	7
学 会	31
協会・研究会・団体	19
出版物の刊行を目的とする団体	1
民 間 企 業	4
民 間 研 究 所	2
報 道 ・ 出 版	18
合 計	185

### 3. 医学中央雑誌との比較

「医中誌」は1903年3月から継続して刊行されている医学文献の抄録誌である。収録誌数は1968年9月現在で1,256誌を数え、医学、歯学、薬学およびその近接領域におけるほとんどすべての文献を網羅していると言われている。

#### a) 収録誌数の比較

「医中誌」では年1回、収録誌の目録を作成して附録としている。「雑索」の収録誌と「医中誌」の収録誌の誌数を比較すると、

	雑 索	医中誌
1964 年	261 誌	1,107 誌
1965 年	252 誌	1,136 誌
1966 年	284 誌	1,164 誌

という結果になった。

これでは「雑索」は「医中誌」の約4分の1弱の収録誌数しかもたないことになるが、これだけではあまりに単純すぎる比較であるから、もっと綿密な分析が必要である。

「雑索」にあって「医中誌」にない雑誌数は

1964 年 (15 巻)	0
1965 年 (16 巻)	4 誌
1966 年 (17 巻)	8 誌

であった。

16巻(1965年)において「医中誌」に収載されていない雑誌は、

大阪医科大学産科婦人科学会雑誌  
呼吸器診療  
東京歯科大学解剖学教室業績集  
臨床の日本

の4誌、また、17巻(1966年)において同様に「医中誌」に収載されていない雑誌は、

大阪府立公衆衛生研究所研究報告  
＜公 害＞  
同 上 ＜公衆衛生＞  
同 上 ＜労働衛生＞  
鹿児島大学体育科報告  
徳島大学教養部紀要 ＜保健体育＞  
日本癌治療学会誌  
Japanese Journal of Medicine

の7誌と、さらに16巻と同様に、

東京歯科大学解剖学教室業績集  
の計8誌であった。

#### b) 医学・薬学以外の収録誌

「医中誌」は医学薬学だけではなく、「其隣接領域」をも収録範囲としているので、「雑索」の医学・薬学部門の収録誌だけをとりあげて比較しても対象にずれが生じてきてしまう。

そこで、「雑索」の誌名索引(医学・薬学を除く)と「医中誌」の収録誌目録を比較して重複を調べてみた。

その結果、「雑索」にも「医中誌」にも収録されている雑誌数は次のようであった。主な内訳を付記した。

16 巻	110 誌
化学・化学工業	22 誌
生物学	21 誌
科学技術	14 誌
など	
17 巻	122 誌
科学技術	30 誌
農林水産学	30 誌
化学・化学工業	21 誌
生物学	21 誌
など	

さらに、収録記事を調査した際に、医学・薬学以外の分野の雑誌から記事が索引されている数と雑誌数を挙げた。つまり、16巻124誌、17巻185誌がその数である。こ

れらの雑誌は「医中誌」に収録されているであろうか。調査したところ、16巻では124誌のうち81誌17巻では185誌のうち124誌が「医中誌」の収録誌目録にみられない雑誌であった。

#### c) まとめ

以上、医学薬学の収録誌およびそれ以外の分野の収録誌について「雑索」と「医中誌」を比較した調査をおこなってきた。ここで全体的な考察を試みて内容を整理しておこう。

まず、16巻(1965年)では、

医学・薬学に	252 誌
医学・薬学記事収録誌で	
「医中誌」未収録	81 誌
医学・薬学以外の分野で	
「医中誌」と重複	110 誌
計	443 誌

443誌のうち362誌が「医中誌」に収録されていることがわかる。1965年9月30日現在の「医中誌」収録誌数は邦文誌1,018誌、欧文誌118誌の計1,136誌である。「雑索」の16巻は欧文標題誌を収めていないので、「医中誌」1,018誌と「雑索」362誌を比較すると35.5%をカバーしていることがわかる。そして、さらに、81誌の「医中誌」未収録誌がある。

次に、17巻(1966年)では、

医学・薬学に	284 誌
医学・薬学記事収録誌で	
「医中誌」未収録	124 誌
医学・薬学以外の分野で	
「医中誌」と重複	122 誌
計	530 誌

530誌のうち「医中誌」に収録されている雑誌は406誌である。1966年9月30日現在の「医中誌」収録誌数は邦文誌1,041、欧文誌123の計1,164誌である。「雑索」は「医中誌」の34.8%をカバーしていることがわかり、なお、124誌の未収録誌があった。

つまり、「医中誌」収録誌の約35%を「雑索」が収録しており、さらに「雑索」収録誌中の「医中誌」未収録誌は、「医中誌」収録誌数の約10%にあたることがわかった。

「医中誌」が医学文献の専門抄録誌として絶対的な評価を与えられているにもかかわらず、これら未収録の雑誌があることを非難することは適当ではない。これらの未収録誌は主たる関心を医学に向けている雑誌とは言えないので、収集および抄録作業は容易なこととは思われ

## 「雑誌記事索引」の包括性と速報性

ない。また、収集が可能であったとしても労多くむくわれることの少ない作業となるであろう。一つの解決策としては、逐次「雑索」をスクリーニングすることにより、つまり、「雑索」という一般的二次資料から専門主題抄録誌の作成という「医中誌」の三次資料化をはかることを考慮することが適当ではないだろうか。

「雑索」が全学問分野を包括する索引誌であることから「医中誌」の収載していない雑誌類をカバーし、医学関係の記事を索引していることは当然とは言え見逃してはならない長所である。しかし、さらに望むとすれば、「雑索」作成者は一般に入手困難な資料、たとえば大学刊行物、学術紀要類、官公庁刊行物などを書誌調整の網におさまるようにより一層尽力すべきであろう。

### 4. 望ましい収録誌数

「雑索」の収録する雑誌の基準についてはあきらかにされていない。しかし、索引する記事については例言に述べられているように、原著論文、研究展望、講座、科学技術資料などとされている。

国立国会図書館から1967年8月刊行された、「日本科学技術関係逐次刊行物目録 1967」は1964年版の全面改訂版であって、1967年3月現在で刊行中の雑誌を収めたものである。

配列は国際十進分類法(U.D.C.)に従い、雑誌数は4,929誌におよんでいる。この目録の特長としては、創刊年、刊行頻度などの記入とならんで“誌の性格”という記入があることがあげられる。これは、次の6つの区分にわけて、雑誌の内容のあらましを理解させようとするものである。すなわち、

- A 原著論文
- B1 総説、展望、解説等
- B2 ニュース、海外情報、事業概要等
- C 抄録
- D データー、統計
- E 通俗科学雑誌 の6区分である。

このうちで、A原著論文、B1総説、展望、解説等は前に述べた「雑索」の例言と一致するものとみてよいであろう。つまり、「日本科学技術逐次刊行物目録」のうちで、誌の性格としてAあるいはB1の符号をつけられているものは「雑索」で収録する必要がある雑誌であるとするわけである。

このような見地から、U.D.C.標数61医学から618婦人科学・産科学までの928誌をとりあげて、AおよびB1の符号のつけられている雑誌を数えたところ、A 535誌、

B1 160誌であった。心理学関係誌は「雑索」では人文・社会編に含まれるので省くことにすると、A 530誌、B1 160誌の計690誌が「雑索」医学・薬学部門の望ましい収録誌数であるといえる。

1967年3月現在、「雑索」は医学・薬学部門に291誌を収録の対象としている。このうちからU.D.C.標数61から618に該当しないものを除くと278誌が残る。278誌対690誌、これでは望ましい収録誌数の約40%強を収録しているに過ぎない。

もちろん、このような方法で他の分野を調査した場合に全体として約2倍の収録誌数を要求することになり、現実的であるとはいえないかもしれない。しかし、すくなくとも現在の収録誌数をかなり増加させる努力が必要なのは事実であろう。

## B. 網羅性についての調査

収録誌のなかから、どのような記事を索引するか、索引すべき記事についての明確な基準は決して確立しているわけではない。例を挙げれば、Index Medicusの選択基準については、津田が紹介しているので引用すると、<sup>16)</sup>

- ①原著論文であれば、その長さや、文の形態に関係なく全部索引する。
  - ②医学関係人物の伝記や死亡記事類は索引する。
  - ③臨床・病理討論会の記事は索引する。
  - ④学会などで発売された相当の長さのある発表論文は索引する。(ただし学会出席者の印象記や、新聞記事的な文は含まない)。
  - ⑤実際には論文と考えられるような論説記事は索引する。(新聞の論説に類するような論説は除く)。
  - ⑥それ自体が論文であると考えられるような“Letters to the editor”の欄の文は索引する。
  - ⑦シンポジウム、パネル、円卓会議などは常にははっきりした主題についての討論であるから公式のものであろうと、非公式のものであろうと索引する。
- 等々。

であるとしている。

日本のものでは、抄録誌ではあるが、日本科学技術情報センター(JICST)発行の「科学技術文献速報」は、記事の種別を示すために記事区分を付けている。この記事区分は逆に採録記事の基準を示していると考えられる



ので、引用すると、

#### a 論文

①原著論文で科学・技術に関し、独創性のあるものの、原著論文の全訳または原著論文に準ずる程度の紹介記事を含む。

②科学・技術的観点から人文・社会科学的なものを取り扱った論評。

③学会の講演要旨；討論。

#### b 編集者への通信

#### c 解説の記事

①新しい技術、製品、構造物の紹介又は解説。

②科学・技術の綜説、展望。

③生産、需要、貿易の統計。

④科学・技術に関する生産の会議、展示会の報告。

#### d データシート、規格、土木建築などの設計図、写真、作業安全基準など。<sup>17)</sup>

となっている。

ところで、「雑索」の選択基準については、その例言で明らかにされている通り、採録する記事は原著論文、研究展望、講座、科学技術資料などである。また除外する記事は、①ニュースの記事、事業報告、会計報告、人事動静など、②定期的統計表、文献リストなど、③資格試験問題、受験者向講座など、④1件につき、2ページ以下の短い抄録・書評・学会発表要旨・製品紹介など、⑤随想、慢筆の類、であるとされている。

Index Medicus は世界的な記事索引誌であり、かつ索引作業を担当する機関が米国だけに限らず全世界に散らばっていることを考慮すれば、この選択基準が比較的細部にまでおよんでいることは当然であろう。これにひきかえ、日本語と若干の欧文標題誌あわせて約1,300誌を索引している「雑索」の場合にはあまり細部にわたる基準を必要としないのも当然と言えよう。

何を索引し、何を索引しないかどうかという索引作成者側の問題はさておき、利用者の立場から「雑索」をみた場合、何が索引され、何が索引されていないかは大きな問題である。ある文献調査の際に、依頼者が学会発表要旨をも求めている場合、学会報告については「雑索」を利用できない。また、個人書誌あるいは専門主題書誌の作成をするときにも「もれ」を覚悟しなくてはならない。このような点から、藤川が「記事は、その雑誌に収載されている限り、極端に価値のないものを除いて、網

羅的に索引してもらいたい、<sup>18)</sup>と述べているのももっともなことである。

選択基準そのものを検討する前に、この「雑索」の例言がどの程度忠実に守られているか、索引されるべき記事で索引されていないもの、また例言の通り索引されていないものについて調査をこころみた。

調査の方法は、「雑索」19巻6号を対象にとり、医学および薬学の部分に記入されている記事を全てカードに写し、さらに他の分野をも探索しておいた。次にこのカードを雑誌別にファイルした。

収録されていた雑誌数および冊数とそのうちで調査した雑誌数、冊数は次の通りである。

収録誌 141 誌 153 冊 (9 誌 11 冊)

調査誌 100 誌 109 冊 (9 誌 11 冊)

(カッコ内は欧文標題誌、内数)

誌数にして収録誌の約3分の2強にあたる雑誌をカードと照合して、ページ付けのある部分で索引されていない記事を探した。その上で索引されていない記事についてカードを作成し、書誌的事項を記入した。

調査の結果は、これら未索引カードを検討したところ、ほぼ例言の通りであって、索引されていない記事は海外文献速報とか外国文献紹介、学会抄録および学会演題、投稿規定やあとがき、編集後記のようなもの、または書評、雑報、ニュース、随想の類であった。書評はほとんどすべてが3分の1ページ程度から2分の1ページ位の量であって、それも商業出版誌に多くみられ、どちらかといえば、広告的性格の強いものであった。

索引されるべき筈のもので索引されていない記事が数点みられた。調査の際の見落としとも考えられるので、当該記事の書誌的事項を「雑索」の記入形式に従って記しておくことにする。

熊原雄一 成長ホルモンの測定とその臨床的意義：日臨 26(6) ['68.6] p. 1391~1401

東条 慧 癌化学療法におけるオロチン酸クロロキンの治療的価値〔博論要旨〕 慶応医学 45(3) ['68.5] P. 別 34~36

選択基準そのものについての適否についての検討が遅れた。しかし、「雑索」については以上の調査結果から現在の基準でほぼ満足できるものと考えてよいであろう。というのは、現在の選択基準をもっと細かにすれば索引作業に要する時間が増し、速報性に欠けることにな

## 「雑誌記事索引」の包括性と速報性

るし、また逆に、速報性に現在以上に重点をおけば選択基準を粗くするほかはないであろう。このジレンマは作成者側に予算や人手の制約がある以上簡単に片付くものではないが、これらの制約を排除するための具体策を検討することは緊要であろう。

### III. 速 報 性

研究者がある研究に着手し、その研究活動中に進行状況を外部に報告する手段として考えられるものには学会での発表とかその他いくつかの方法がある。ところで、研究の成果をまとまった形であらわすとすれば、現在のところ、雑誌論文がもっとも適当であると言えよう。

しかし、その雑誌論文の形で研究成果があらわれるには、研究に着手してから36カ月、つまり3年もかかり、この論文も最初の投稿先で採用もれになるとさらに1年ほど遅れるという。<sup>19)</sup> さらに、この雑誌に発表された論文(記事)が索引誌や抄録誌に索引され、抄録されるまでには4カ月から、ものによっては10カ月という時間的なずれがある<sup>20)</sup>とされている。ここで述べた例はいずれも欧米における調査結果によるものではあるが、おそらくわが国においてもあてはまることではないだろうか。

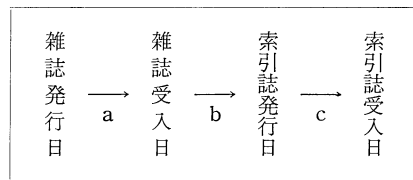
雑誌の発行までの原稿類の滞貨などはさておき、発行後、索引誌・抄録誌に収録されるまでの期間は一般に索引誌3カ月、抄録誌6カ月といわれている。そして、さらに場合によっては索引誌・抄録誌が実際に図書館員なり研究者なりの手に入るまでの期間、このあいだは索引誌・抄録誌を使用しての組織的な文献探索活動はおこなえないわけである。この遅れをすこしでも少なくするために、Current Contentsのような目次速報誌が登場するわけであるが、これも根本的な対策とはなっていない。

発表された論文をいかに速かに索引誌に索引するかということは大きな問題である。そこで、索引作成者側ではコンピュータなどによる索引作業の機械化、作業の合理化・能率化がはかられたり、テクニカル・サービス部門における Cataloging-in-Source と対比されるような、Documentation-in-Source であるとか Indexing-in-Source というような活動の提唱がなされたりする。また、雑誌編集者の側でも、単なる情報過多に起因するのではない雑誌の未来論がとりざたされているし、現に、原論文の刊行前に抄録を刊行するという雑誌もあらわれているという。<sup>21)</sup>

速報性つまり発表された論文を索引誌がどの位迅速に収録するかを論じる際には、ふつう、タイム・ラグ(Time-lag)という概念を導入して論じることが多い。しかし、このタイム・ラグという概念は使う人により、対象によりいろいろと変化することが多く規定することが難しい。

原稿の作成、受理から雑誌の発行迄の期間は別として、雑誌の発行からこの雑誌を索引した索引誌の発行および受入までを図表にして示すと第1図のようになる。この図によってタイム・ラグを考えてみよう。雑誌発行日と雑誌受入日(a)、索引誌発行日と索引誌受入日(c)のそれぞれの期間は決して0ではない。つまり、雑誌が受入れられない以上索引作業はできないし、また索引誌が発行されても受入れられない以上利用できない。そこで、雑誌受入日から索引誌発行日のあいだ、つまり第1図でbであらわされる期間をタイム・ラグと考えるのも不適当になる。

第1図 タイム・ラグ概念図



ここではタイム・ラグを次のように規定することにしよう。国内の索引誌・抄録誌で国内の雑誌を収録対象としている場合には、タイム・ラグは雑誌の発行日からその雑誌の記事が索引・抄録されている索引誌・抄録誌の発行日までの期間を言う。しかしながら、この規定がなりたつためには、雑誌編集者と索引作成者のおたがいの協力で雑誌発行日と受入日の間隔をせばめ、索引作成者(もしあれば同発行者と)の側で索引誌発行日と受入日の短縮をはかる努力をする必要がある。

本論文におけるタイム・ラグ調査に際しては今述べた定義の一部を変更する必要が生じる。その理由は、収録されている雑誌および索引誌のいずれもが発行日不明であることによる。もちろん、発行日の記入は収録誌および索引誌にみられるが、これが実際の発行日と異なることは周知の通りである。そこで、本論文においては、雑誌受入日をもって発行日とみなし、索引誌受入日を同発行日と仮定し、この期間、雑誌受入日から索引誌受入日までの期間をタイム・ラグとした。この2つの仮説の妥当性については後述する。

言葉をかえて、タイム・ラグを表現するとすれば、ある図書館において、雑誌が利用できる状態になったときから索引誌と雑誌とのあいまでの利用が可能になったときまでの間をタイム・ラグであるとするわけである。

#### A. タイム・ラグ

調査の対象として次のようなものを設定した。まず図書館として国立国会図書館（以下NDLと省略）と慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館（以下KOと省略）の2館。タイム・ラグを調べるための標本として雑誌25誌（大学刊行物・学会誌 15誌，商業誌 10誌）。対象とする「雑索」は16巻1号（1965年1月）から18巻6号（1967年6月）の2年半分，30冊。

「雑索」の場合，同じ雑誌に発表された記事はすべて「雑索」でも同じ号に収録されている。そこで，まず調査に際し，「雑索」の各号の収録誌一覧により標本誌が収録されているかどうかをチェックし，収録されている場合には，「雑索」の巻号とその雑誌の巻号をメモした。次にNDLとKOにおける「雑索」および標本誌の受入日を調べた。そして，そのあいだの日数をタイム・ラグとして算出した。

次の第8表は上記調査項目について，日本眼科学会雑誌と小児科診療を例にあげて表にしたものである。

タイム・ラグについてどの程度が妥当であるかを述べ

第7表 タイム・ラグ調査誌

大学・学会誌	商業誌
日本眼科学会雑誌	形成外科
日本外科学会雑誌	外科治療
日本整形外科学会雑誌	最新医学
日本内科学会雑誌	産科と婦人科
ビタミン	小児科診療
岩手医学雑誌	神経研究の進歩
北関東医学	診断と治療
慶応医学	整形外科
熊本医学会雑誌	生体の科学
札幌医学雑誌	肺と心
東京医学雑誌	
東京医科大学雑誌	
東京慈恵会医科大学雑誌	
東京女子医科大学雑誌	
福岡医学雑誌	

た論文は少ない。A. J. Walford<sup>22)</sup> はとり扱う主題にもよるが，刊行頻度の2倍，つまり月刊のものならば2カ月の遅れをやむを得ないものとして肯定している。「雑索」のタイム・ラグについては，石山は「現在の作業方式では，原稿作成後，印刷初稿が出始めるまで2週間，初稿が出始めてから校了まで3週間，その後納品まで1

第8表

その1 日本眼科学会雑誌

巻 号	発行年月	NDL 受 入 日	K O 受 入 日	収録する 雑 索	NDL 受 入 日	K O 受 入 日	タイム・ラグ	
							NDL	K O
70 (1)	'66. 1	1.26	1.26	17 (1)	4. 8	5.16	72	110
(2)	2	2.22	2.21	(2)	5. 4	6.14	71	123
(3)	3	3.31	3.30	(3)	6. 1	6.28	62	90
(4)	4	4.14	4.13	(4)	6.30	7.26	77	104
(5)	5	5.21	5.21	(5)	8. 1	8.23	72	94
(6)	6	6.27	6.23	(6)	9. 5		70	
(7)	7	7.28	7.27	(7)	10. 4	10.24	68	89
(8)	8	8.30	8.30	(8)	11.11	12. 7	73	99
(9)	9	9.17	10. 1	(9)	12. 9	1.23	83	114
(10)	10	11. 4	11. 5	(11)	2.13	2.20	101	107
(11)	11	12. 7	12. 7	(12)	3.15	3.28	98	111
平 均							77	105

「雑誌記事索引」の包括性と速報性

その 2

小 児 科 診 療

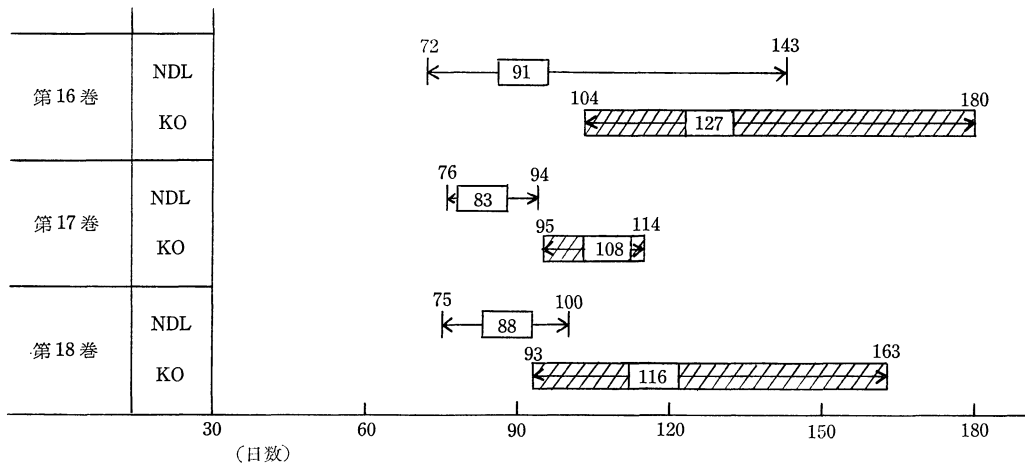
巻 号	発行年月	N D L	K O	収録する 雑 索	N D L	K O	タ イ ム ・ ラ グ	
		受 入 日	受 入 日		受 入 日	受 入 日	N D L	K O
29 (2)	'66. 2	1.13	1.17	17 (1)	4. 8	5.16	85	119
(3)	3	2.11	2.15	(2)	5. 4	6.14	82	119
(4)	4	3.14	3.15	(3)	6. 1	6.28	79	105
(5)	5	4.18	4.16	(4)	6.30	7.26	73	101
(6)	6	5.20	5.21	(5)	8. 1	8.23	95	94
(7)	7	6.20	6.18	(6)	9. 5		77	
(8)	8	7.15	7.19	(7)	10. 4	10.24	81	97
(9)	9	8.18	8.20	(8)	11.11	12. 7	83	109
(10)	10	9.17	9.16	(9)	12. 9	1.23	83	129
(11)	11	10.20	10.21	(10)	1.16	2. 4	72	106
(12)	12	11.19	11.18	(11)	2.13	2.20	88	94
30 (1)	'67. 1	12.15	12.13	(12)	3.15	3.28	90	105
平 均							83	108

週間、計 6 週を要し、その月の原稿ができるのが翌月の10日頃なので、大体翌月の下旬までは刊行に要する期間となる。すなわち 2 カ月後の刊行が可能<sup>23)</sup> であると述べている。

調査を行なった結果、タイム・ラグについて大学刊行物と商業誌との間に有意の差はみられず、NDLにおいては約90日、KOにおいては約120日であった。第2図は「雑索」各巻におけるタイム・ラグをNDL、KOの別に最大、最小、平均値を図示したものである。

NDL における約90日の遅れは先に引用した Walford

や石山の意見からすれば、タイム・ラグが大きいと言えよう。そしてKOではNDLよりもさらに約30日遅れて約120日のタイム・ラグがあることはどう説明できるのであろうか。NDLとKOを比較した際に、NDLの方が速かに「雑索」を受入れられることは当然であろう。しかし、約30日におよぶ“ずれ”の原因は何であろうか。この原因として考えられるのは次の2つである。①両館ともほぼ同じ時期に雑誌が到着しているのに「雑索」はKOの受入が遅れる場合。②両館ともほぼ同じ時期に「雑索」を受入れているのに雑誌の受入はKOの方が早



第 2 図 「雑索」各巻におけるタイム・ラグの平均と最大・最小

い場合。

この2つの場合を検討するとすれば、「雑索」の受入日を調査することが必要になってくる。この調査を次に述べる。

## B. 受入日調査

「雑索」の受入日を調査する第1の目的はNDLとKOのタイム・ラグの差があまりに大きいことから生じた疑問を解くためである。しかし、ここではそのことだけにとどまらず他のいくつかの図書館を対象として調査した結果をも併せて報告することにしよう。

NDL(「雑索」編集館)、KO(購入館)のほか、NDLより寄贈を受けている4館、  
東京女子医科大学図書館(TJ)  
慶応義塾図書館 定期刊行物課(KG)  
慶応義塾大学 図書館・情報学科図書室(SLIS)  
国際文化会館図書室(IHJ)  
書店を通じて購入している2館  
北里大学 図書館(KU)  
慶応義塾図書館 参考調査課(REF)  
である。これらの受入日を第9表に示した。

編集者であるNDLの参考書誌部索引課における「雑索」の受入日と、同館から寄贈を受けている館、および書店を通じて購入している館のそれぞれの受入日の違いはあきらかである。この差がおそらくは約30日におよぶKOとNDLとのタイム・ラグの差になるであろうことは想像にかたくない。受入日の差異について石山<sup>24)</sup>は“当館(筆者注:NDL)で送付するものは11~20日後に入手する例がピークをなしているのに、発売元経由のものが人文・社会編では21~30日、科学技術編では31~40日が最多数を占めている、”として1967年10月に行なったアンケート回答の要約を述べた際に指摘している。

寄贈のものと一般に販売されるものの書誌的なちがいは一般に販売されるものには、表紙、標題紙、奥付に発行書店名と国立国会図書館編集の文字があるだけである。これを印刷するために要する時間や手間を考えたとしても、前に述べた遅れは納得できるものではない。

速報性を要求される「雑索」が販売に携わる人々の理解の不足により、あるいは編集者の指導の不足によって、むざむざとそのタイム・ラグを増していくことは残念である。また、ここで一言つけくわえるならば、雑誌編集者には雑誌発行後速やかに納本することが要求されて然るべきであろう。研究者の汗の結晶とも言える研究論文

を少しでもはやく公のものとし、他の研究者に報知させることは雑誌編集者の重要な任務であろう。速かな納本は速かな二次資料化につながり、Current Awarenessにせよ Retrospective Searchにせよ文献探索の網にかかりやすくすることにつながるからである。

## 結 語

これまで、「雑誌記事索引」のうちから医学・薬学部門の収録誌と速報性について焦点をあてて評価の基礎データを提供してきた。ここで行なった調査によりあきらかになったことは、

- ①「雑誌記事索引」の医学・薬学部門だけをとりあげたときの収録誌数は292誌(1966年)であるが、「雑誌記事索引」科学技術編全体と「医学中央雑誌」の収載誌を比較すると約35%の雑誌を収録していること。
- ②「雑誌記事索引」の収録記事についての選択基準は現在のままではほぼ満足できるものであること。
- ③「雑誌記事索引」のタイム・ラグは編集にあたる国立国会図書館では約90日、慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館では約120日であった。タイム・ラグを短縮するためには、雑誌編集者の速かな納本、迅速な索引作業、販売担当者の速やかな納品が必要とされること、である。

医学分野においては幸いにして「医学中央雑誌」という永い伝統をもち、学会報告まで抄録する網羅性と千数百誌を収載する包括性のいずれにも秀でた抄録誌がある。この「医学中央雑誌」の存在により、残念ながら「雑誌記事索引」は頻繁に利用される二次資料とはいえない。しかし、速報性に眼を転じた場合、「雑誌記事索引」はおそらく「医学中央雑誌」よりもすぐれていることがあきらかになるであろう。このことは、医学分野においても最新文献の探索の際には「雑誌記事索引」の利用を考慮しなくてはならないことを示している。

石山の調査<sup>25)</sup>によって、「雑誌記事索引」は週1~2回、月1~3回の利用が多数を占めていることが知られる。「雑誌記事索引」がなぜもっと利用されないか、徹底的な追求が必要とされることがわかる。そして、その結果を索引作成者にフィード・バックすることが求められているのではないだろうか。

文献量の増大にともない、またコンピュータ技術の進歩に呼応して、諸外国ではコンピュータによる索引作成

「雑誌記事索引」の包括性と速報性

第 9 表 「雑 索」 受 入 日

年	「雜 索」 卷 号	編 集 館	寄 贈				購 入		
		N D L	S L I S	I H J	K G	T J	K O	R E F	K U
1965	16 ( 1)	5.28	6.16	6.30	6.25	6.25	7. 5		
	( 2)	6.11	7. 9	6.30	7.23	7.23	8. 3		
	( 3)	6.29	7. 9	6.30	7.23	9. 4			
	( 4)	7.14	7.23	7.23	9. 3	9. 4			
	( 5)	8. 7	8.20	8.19	9. 3	9. 4	8.31		
	( 6)	9. 9	9.24	9.24	10.12	9.30	9.27		
	( 7)	10.11	10.18	10.18	11. 9	10.21	11.12		
	( 8)	10.30	11.11	11.12	12. 1	12.20	11.29		
	( 9)	11.29	12.15	12.14	12.24	12.20	1.23		
	(10)	12.23	1. 8	12.29	1.25	1.24	1.31		
	(11)	1.28	2. 7	2. 4	3. 1	3. 4	2.28		
	(12)	2.25	3. 7	3. 7	3.28	3.25	4. 4		
1966	17 ( 1)	4. 8	4.27	4.27	4.27	4.25	5.16	4.27	
	( 2)	5. 4	5.30	5.30	5.27	5.28	6.14	5.27	
	( 3)	6. 1	6.15	6.15	6.16	6.17	6.28	6.22	
	( 4)	6.30	7. 9	7. 9	7.12	7.11	7.26	7.28	
	( 5)	8. 1	8.22	8.23	8.29	9. 2	8.23	9. 8	
	( 6)	9. 5	9.14	9.14	9.21	9.26		9.21	
	( 7)	10. 4	11.10	11.11	10.31	10.29	10.24	11.17	
	( 8)	11.11	11.30	11.30	12. 6	11.24	12. 7	11.28	
	( 9)	12. 9	12.16	12.17	12.20	12.22	1.23	12.20	
	(10)	1.16	1.27		1.30	1.23	2. 4	2.16	
	(11)	2.13	2.21		3. 1	2.22	2.20	2.22	
	(12)	3.15	4. 1	3.30	4. 4	3.27	3.28	3.28	
1967	18 ( 1)	4.19	5. 2	5. 1	5. 8	5. 4	7. 1	7. 4	7.21
	( 2)	5.22	6. 5	6. 5	6. 5	6. 8		7. 4	7.21
	( 3)	6.12	6.22	6.22	6.29	6.22	7. 1	7. 4	7.21
	( 4)	7. 3	7.24	7.24	8. 3	7.24	7.22	7.26	8. 2
	( 5)	7.31	8.15	8.12	8.15	8.18	8.27	8.23	8.30
	( 6)	9. 6	9.20	9.20	9.22	9.21	9.23	9.28	11. 7
	( 7)	10.11	10.23	10.24	10.26	10.23	11.27	10.24	11. 7
	( 8)	11.14	11.27	11.24	11.25	11.24	11.27		12. 9
	( 9)		1. 8	1. 6	1. 8	12.29	1.29		1.12
	(10)		1.29	1.31	1.29	1.30	1.29		1.25
	(11)		2.24	2.26	2.28	2.26	3. 4		3.12
	(12)		4. 3	4. 6	4. 4	4. 4	5. 4		4. 2
1968	19 ( 1)		5.16	5.17	5.21	5.17	7.16		7.10
	( 2)		7. 2	6.26	6.27	6.27	7.30		6.28
	( 3)		7.10	7.15	7.15	7.11	8.26		7.13
	( 4)		8. 5	8. 7	8. 8	8. 5	10. 5		8.16
	( 5)		9.12	9.12	9.18	9.13	11. 9		9.12
	( 6)		10.11	10.12	10.14	10.12	12.23		10.11
	( 7)		11.26	11.26	11.27	11.25	1.25		11.27
	( 8)		12.16	12.16	12.17	12.17	2.22		12.16
	( 9)		2. 4	2. 3	2. 4	2. 5	4.12		2. 3
	(10)		3.14	3.14		3.24	4.23		3.14
	(11)		3.31	3.31		3.31	7. 2		4.12
	(12)		4.25	4.24		4.26	8.13		4.28

が実用化されて久しい。わが国においても、日本科学技術情報センター（JICST）の「科学技術文献速報」のコンピュータ化が一部で実現されている。「雑誌記事索引」にとってもこのことは無関心に見過すことのできないことであり、近い将来、機械化、コンピュータ化が必要と

なることは明白である。この動きに敏速に対応していかないと、「雑誌記事索引」そのものの存立をもおびやかされることになるとも考えられよう。

「雑誌記事索引」という、わが国でも代表的な索引誌が一方ではただ日常業務的に作成され、一方ではただ書

架に運び、あるいは利用できないと文句を言う、はなはだしいものは科学技術編の廃刊を云々する。国家的な書誌調整のうえでも大きな位置を占める「雑誌記事索引」に対する態度がこのような状態であっては決してよい索引誌は生まれてこない。作成者、利用者、利用を援助する図書館員の協力により、さらに便利で利用可能な「雑誌記事索引」を作成していかななくてはならないのである。  
(北里記念医学図書館)

- 1) 津田良成. “索引作成法”, *学術月報*, vol. 20, 1967. 5, p. 120-3.
- 2) Mudge, I. G. *Guide to reference books*, 6th ed., Chicago, American Library Association, 1936. p. 5.
- 3) Shores, L. *Basic reference sources*. Chicago, American Library Association, 1954. p. 175.
- 4) 弥吉光長. 参考図書の解題. 理想社, 1955. 259 p.
- 5) 西村捨也. “索引についての覚書き—雑誌記事索引を中心に—”, *図書館界*, vol. 10, 1958. 12, p. 129-36.  
———, “索引に関する研究序説—主として雑誌記事索引の系譜と機能についてアメリカを中心にして考察—”, *図書館学会年報*, vol. 6, 1959. 6, p. 24-46.
- 6) 陶山国見. “雑誌記事索引のこと”, *びぶろす*, vol. 8, 1957. 7, p. 3-6.
- 7) 長沢雅男. 参考調査資料概説. 三田図書館学会, 1967. p. 89-90.
- 8) Downs, R. B., 国立国会図書館に於ける図書整理 文献参考サービス並びに全般的組織に関する報告. [*National Diet Library; Report on technical processes, bibliographical services and general organization.*] 国立国会図書館, 1948. p. 13.
- 9) *Ibid.*, p. 13-4.
- 10) “「雑誌記事索引」編さんの経緯と現状”, *国立国会図書館月報*, no. 76, 1967. 7, p. 3.
- 11) 石山 洋. “「雑誌記事索引」の利用状況等のアンケート回答の要約”, *国立国会図書館月報*, no. 88, 1968. 7, p. 2.
- 12) 医学中央雑誌収載誌目録—昭和41年9月30月現在—, 医学中央雑誌刊行会 [1966], 40 p.
- 13) 国立国会図書館参考書誌部科学技術課. 日本科学技術関係逐次刊行物目録 1967. 国立国会図書館, 1967. 660 p.
- 14) “刊行頻度別および分類別誌数一覧”, *雑誌記事索引 科学技術編* vol. 18, no. 12, 1968. 1, p. 別 15.
- 15) “「雑誌記事索引」編さんの経緯と現状”, *op. cit.*, p. 11.
- 16) 津田良成. 索引法. <文部省大学学術局. ドキュメンテーションハンドブック (文献情報便覧) 東京電機大学出版局, 1967> p. 516.
- 17) “利用の手引き” *科学技術文献速報 国内化学編 日本化学総覧*より
- 18) 藤川正信. 第二の知識の本. 新潮社, 1964. p. 198-99.
- 19) Garvey, W. D. and Griffith, B. C. “Science information exchange in psychology,” *Science*, vol. 146, 25. Dec. 1964. p. 1655-9.
- 20) Orr, R. H. and Crouse, E. M. “Secondary publication in cardiovascular, endocrine and psychopharmacologic research,” *American documentation*, vol. 13, Apr. 1962, p. 197-203.
- 21) 溝口歌子. “「学術雑誌の未来像」に関して—内外二つのこと—”, *自然*, vol. 23, 1968. 10, p. 97-100.
- 22) Walford, A. J. *Bibliographies*. <Collison, R. L., ed. *Progress in library science* 1966. London, Butterworth, 1966> p. 48-68.
- 23) 石山 洋. “国立国会図書館編「雑誌記事索引」(科学技術編)の全国書誌サービスにおける位置づけ”, 第2回ドキュメンテーション研究集会発表論文集 日本科学技術情報センター, 1965. p. 55-9.
- 24) 石山, “「雑誌記事索引」の利用状況等のアンケート回答の要約,” *op. cit.*, p. 2.
- 25) *Ibid.*, p. 5.